

「ペンテコステを

どうとらえるか」

しよう。

ペンテコステ 五旬祭

ペンテコステは、クリスマス、イースターと共にキリスト教の三大祝日のひとつとされています。しかし、そのわりに他の二つほどには覚えられてはいないように思います。

クリスマスやイースターには、祝会や愛餐会など、さまざまな行事があり、CSでも、クリスマスにはこどもたちにプレゼントを用意したり、イースターにも卵を配ったりすることでしょう。けれども、「ペンテコステの祝会」や「ペンテコステ・プレゼント」などは、あまりなじみがないようです。

ペンテコステを、どのように迎えるのがふさわしいか、その意味を学びながら考えてみま

「ペンテコステ」とは、ギリ

シア語で「五十番目(の日)」の意味です。余談ですが、「ペンタゴン(五角形—アメリカ国防総省は五角形の建物なのでこう呼ばれる)」「ペンタトニック(五音階)」などと並べると、「ペンテ」が「五」をあらわす

ことがわかりでしょう。ペンテコステを漢語に訳したのが「五旬祭」です。「旬」は「十日」のことですから、うまく訳したといえるでしょう。

ではペンテコステ＝五旬祭は、どこから数えて「五十日」なのでしょう。これは、ユダヤの大切な祭である過越祭から五十日、なのです。レビ記二三章一五節以下に、この「五十日」の祭について定めてありま

す(申命記一六章九節以下も参照)。

このレビ記の個所に「五十日を数えたならば、主に新穀の献げ物を献げる」とあるように、この祭はもともと穀物の収穫の感謝の祭としての意味をもっていました。過越祭には収穫の「初穂」を献げ、そして五日後、収穫の季節の終わりにまた感謝の祭を献げたのです。

また、後の時代になると、この祭は、神との契約の祭と理解されるようになったといえます。かつてエジプトで奴隷であったイスラエルの民は「過ぎ越し」のできごとによってエジプトを脱出した後、モーセに導かれてシナイ山に至り、そこで神と契約を結びます。イスラエルは「神の民」として生きることを約束し、そのための律法を与えられました。五旬祭は、このできごとを記念する祭とされ

るようになったのです。

なにが起ったか

このように、五旬祭は、古くからのユダヤの祭日でしたが、キリスト教会は、この日を、まったく新しい内容の祭として記念するようになりました。そのことが、使徒言行録二章に記されています。以下、聖書の記すところに従って、ペンテコステの意味をさぐっていきましょう。

「五旬祭の日が来て、一同がひとつになつて集まっていた」とあります。この「一同」とは、使徒たち(二章二六節参照)のことでしょうが、あるいは、もつとたくさんの人々をも含んでいるのかもしれませんが(一章一四〜一五節参照)。彼らは、この年の過越祭から五旬祭までの五十日間に、人生を変えて

しまうような大きなできごとを体験していました。過越祭のとき、彼らが従ってきたナザレのイエスが十字架で殺されてしまったのです。しかし、その後、彼らは、このイエスがよみがえり、現れ、そして天に昇っていくのを体験しました。そうしたこと、この五十日の間に起こっていたのです。

さて、過越祭から、ということとはつまり、イエスの十字架の死と復活から五十日になるうというこの五旬祭の日、使徒たちが集まっていると、「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ…」とあります。ここでのキーワードは「風」です。聖書の中の「風」ということばは、「息」を、そしてまた「霊」をも意味することばでした。では、「風」と「息」と「霊」とは、どのようなつながるでしょうか。

このことを考えるとき、私はいつも二つのイメージを思い浮かべます。

ひとつは、創世記二章七節の「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」というシーンです。神の「息」が土のかたまりに命を与え人として生きるようににした、というのです。人が人として生きるようにさせる神の力、それが神の「霊」、聖霊ではないでしょうか。

もうひとつ思い浮かべるのは、木立が風に吹かれて揺れ動いている光景です。「風」は目には見えません。しかし、それは大木をも揺り動かす力をもっています。風は目には見えませんが、それは確かに存在し、さまざまな作用をおよぼします。風そのものは見えなくとも、その働き（木が揺れる、風車が回

る、など）を見ることができ、それによつて風の存在を知ることができます。神の「霊」もまた、そのものを見たりつかんだりすることはできなくても、その働きによつて存在を知ることができます。

ここで「激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ…」とあるのは、まさしくそのように人を生かし揺さぶり動かすに人の生かし揺さぶり動かす天の神の力、神の霊が吹ききたったことをあらわしています。

さて、使徒言行録の記事は、さらに「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」と続きます。旧約聖書には、神が人と出会うとき、しばしば「炎」を伴ったことが記されていますから（出エジプト記三章二節など）、ここでも「炎」は神の働きかけを示しているということが出来ます。さらにだいたいなポイントは、ここ

で一人一人に「舌」が与えられた、ということでしょう。「舌」は「語る力」を意味します。続いて「一同は聖霊に満たされ、
“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した」とあります。この「言葉」という語は、「舌」とまったく同じ単語です。使徒たちに働きかけた神の霊は、かれらに、語る言葉を与えたのでした。

かれらの言葉は、けつして意味不明な叫びやつぶやきではありませんでした。七節以下には、まわりの人々が「どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだからか」「かれらがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」と驚いたようすが記されていますから、使徒たちは、まわりの人々によくわかる言葉で語りだしたのでしょうか。

このできごとは、しばしば「バベルの塔」のできごとと対比されます。創世記十一章に記された有名な「バベルの塔」の物語では、はじめ「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」のに、人間の高ぶりのために「互いの言葉が聞き分けられぬように」されてしまったことが語られています。ここには、言葉が互いに通じないことが世界の混迷の根底にある、という洞察が含まれているといえるでしょう。

これに対し、使徒言行録二章に記されているのは、「世界の人々に通じる言葉が与えられた」というできごとです。そういう形で「バベルの塔」以来の混乱を克服する道が与えられたのです。ただし、互いに通じない言葉を克服したのは、世界の人々の多様な言葉をひとつに統一する、というやりかたで

はありませんでした。人々が、それぞれ互いに違う言葉を語っているという状況は変わリません。しかし、「違い」は、もはや人々を隔てる力を失ったのです。人々の多様なありかたはそのままで、神のことは、神の働きかけが、それぞれに通じる仕方で届けられるようになったのです。

このことは、その後のキリスト教のありかたを決定するほどの大きなことであつたといわねばなりません。

それまで、聖書の神への信仰は、基本的にはユダヤ民族だけのものでした。神は、世界の民の中からこの民だけをご自分の民として選び、エルサレムを特別な場所とし、具体的な生活の指針として律法を与えた、とされてきました。聖書に記されている神を信仰する、ということとは、エルサレムを中心とし律

法に基づいて生活するユダヤ民族の一員になる、ということだったのです。

しかし、ペンテコステのできごとは、世界の多様な民が、多様なままで、神の恵みにあずかることができることを示しました。もはや神はひとつの民だけに独占される神ではなくなつたのです。

では、世界の多様な民に届けられる神の恵みとは、いったい何だつたでしょうか。使徒たちは、さまざまな言葉で、人々に向かつて何を語り始めたのでしょうか。

このとき、使徒たちを代表してペトロが語つた説教が、一四節以下に記されています。かなり長い文章ですが、その中心は、二二〜二四節にあると思えます。

二二節では、「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方

です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによつて、そのことをあなたがたに証明なさいました」と、イエスの地上の生涯が振り返られています。「二三節では、「このイエスを、あなたがたは、十字架につけて殺してしまつた」と、イエスの死と「あなたがた」の罪が示されます。そして二四節ではそのイエスの復活が告げられます。つまり、ペトロの説教は、十字架の死にいたるイエスの生涯と復活は「あなたがた」にとつてひとごとではなく自分自身の生き方にかかわることなのだ、と言っているのです。このペトロの言葉に心動かされた人々は、使徒たちの仲間に加わっていきます(四一節)。ナザレのイエスの生と死は、自分にかかわることだ、と信じた人々が、使徒たちの仲間となり、

新しい生き方を共に生き始めていったのです。これは、新しい信仰の共同体の誕生といふべきできごとでした。

ここに生まれた信仰の共同体は、新しい神の民とよぶにふさわしい群れでした。それは、これまで考えられていた神の民のあり方とはまったく違う、新しい内容の共同体でした。もはや、言葉の違い、文化の違い、民族の違い、生活の違いは隔てとならず、ただ、あのイエスという方の生と死そして復活が、自分の生涯にかかわることであると信ずる信仰によって、互いに結ばれ、共に生きる人々の群れ、共同体が形作られ始めたのです。これこそ、キリストの「教会」にほかなりません。ですから、ペンテコステは教会が始まった日、「教会の誕生日」とされるのです。

新しい五旬祭

さて、ここでもう一度、昔ながらのペンテコステⅡ五旬祭の意味を振り返ってみましょう。五旬祭は、過越祭で献げられた初穂に導かれた収穫の感謝の祭でした。また後には、シナイ山で契約が結ばれ、神の民が成立した記念の祭とされるようになりました。

キリスト教会で新しく祝われるようになった五旬祭は、過越祭のときに「初穂」として献げられた御子イエス・キリストによって多くの実りが導かれ、新しい神の民である教会が成立したことを感謝し祝う祭となりました。キリスト教での五旬祭、ペンテコステは、まったく新しい内容の記念の祭となりながら、そこには昔ながらの祭の意味もまた引き継がれているということができます。遠

い昔からの歴史を導く神の計画の不思議さを思います。

それでは、今、わたしたちは、どのようにこのペンテコステを祝うべきでしょうか。

これまでに出てきたいくつかのペンテコステにまつわるキーワードがあります。「炎」「聖霊」「言葉」「教会」：…。クリスマスやイースターには、「星」「飼葉桶」「クリスマスツリー」「十字架」「墓穴」「エマオへの道」「卵」など、さまざま

なシンボルがあり、わたしたちの信仰生活をゆたかにしています。ペンテコステについても、これらのキーワードを手がかりとして、今このときにふさわしい、豊かなペンテコステの祭を形作っていくといいと思うのです。

私自身は、ペンテコステが「閉ざされていた神の民が、外に向かつて開かれ、新しくされ

た」できごとである、という点に心ひかれています。ときは初夏、「風」のさわやかな季節、教会の窓も、私たちの心の扉も、思いきつて開け放ち、私たちが揺さぶり動かす天からの「風」に吹かれてみませんか。

(久世そらち)

『教師の友』

二〇〇二年四・五・六月号掲載